

看護職部門

優秀賞

小さなエール

【佐賀県】 齋藤 泰臣 さいとう やすおみ 42歳

「一緒に帰れるの？ やった！

ママ、早く起きてよ。お家に帰れるよ。帰ったらおもちゃで遊ぼうよ。ねえ、これ見て。ほら、すごいでしょ。ねえ、起きてよママ」

私が所属する緩和ケア病棟に入棟してきたその患者さんは、30歳代のがん終末期の女性で脳転移があり、自発的な発語や体動は、ほぼ見られなかった。仕事を抱えている夫の代わりに、患者さんの母親が毎日のように面会に来ていた。そして、その傍らには祖母に手を引かれた4歳の男の子。「ママ、これ見て。これがこうなると、強くなるんだよ」と、母親が置かれている状況を到底理解できていないその子は、手に握り締めた流行のおもちゃを、

わずかに眼が開くだけの母親に得意げに見せていた。

同じおもちゃを同年代のわが子を持つていたこともあり、私は訪室するたびにその子とおもちゃで遊ぶようになっていた。「この子には少しずつ母親のことを話していきます」と、その子の無邪気な声が響く病室で、祖母は幼子を残して逝く娘を不憫に思い涙していた。

しばらくして、その患者さんは家族に見守られながら旅立たれた。「ママと一緒にお家に帰ろうね」と祖母に言われたその子は、喜びながらいつものおもちゃを手に、まだ温もりの残る母親の身体を何度も何度も揺すっていた。病棟を出る際も、「ママ、待ってよ」と、ストレッ

チャーで運ばれていく母親を、小さな歩幅で懸命に追いかけていった。

勤務を終え家に帰ると、寝室には寝息を立てているわが子。枕元には、あの子が握っていたおもちゃと同じ物が置いてあった。同じ親として、幼子を残して逝く者の無念を思っただけか、残される子の悲しさを思っただけか、その時どのような感情が去来したのかは分からなかったが、子どもの枕元でおもちゃを手にし、私は声を殺して泣いていた。

もしかすると、あの子は母親の死を理解していたのでは。あの小さな身体で懸命に「僕は大丈夫だから。心配しないで」と母親にエールを送っていたのではないだろうか。今はそう思えてならない。